

各兵團部隊は夫々軍の企圖に基き攻勢を準備す
第二十四師團正面に於ては敵の一部吳屋、翁長に進出す
前田高地は第二十四師團の歩兵第三十二聯隊の一大隊第六十二師
團の獨立歩兵歩兵第十二大隊等高地中腹附近に在る洞窟に據り山
上の敵と交戦中なり
第六十二師團正面に於ては城間附近は敵手に落ち主なる戦線は仲
間安波茶、澤嶋北側高地内間勢理客の線に在り其の有力なる一部
は敵線内洞窟陣地に分散残存し依然抵抗を続けあり

五月一日、二日

第二十四師團は陣地に近接する敵に痛撃を加へ之を撃退しあり
第六十二師團は全線死闘中なり

五月三日

左逆上陸隊は船舶工兵第二十六聯隊長卒先陣頭に立ちて挺進し攻
撃概ね成功せるものの如く傍受電話に依れば敵は友軍相撃し相當
混亂しあること明瞭なり

右上陸隊は上陸に先だち甚大なる損害を受けたるも其の一部は上
陸に成功し戦闘中なるものの如し
混成旅團の夜間機動は敵の砲撃下約七十名の死傷者を出せるも概
ね計畫の如く進捗しつつあり

五月四日

第二十四師團は軍砲兵隊と協同し豫定の如く攻撃を開始し○五三
○翁長東北地區に突入せり即ち

右翼歩兵第八十九聯隊の攻撃は初期比較的順調に進捗し上原高地
中腹迄進出し得たるも間もなく敵陸海空の集中火を受け一舉に甚
大なる損害（二分一以上）を蒙り四日正午頃以後攻撃全く頓挫し
大規模に利用せる煙幕の消散すると共に愈々損害を増加するのみ
なり中央歩兵第二十二聯隊は既に兵力著減しありしのみならず師
團の攻撃部署變更の關係もありて攻撃成果見るべきものなし
左翼歩兵第三十二聯隊主力は敵情地形不明の裡亂戦中の第六十二
師團右翼部隊に混入し行動意の如くならず前田高地の頂上を完全

に占領するに至らず只同聯隊の伊東大隊（獨立第二十六大隊屬）は宜野灣街道東側を巧に突入し相原北側高地を占領したるが如きも連絡杜絶して其の状況明かならず

戦車第二十七聯隊も亦前田東側地區に突進せるも其の状況適時判明するに至らず獨立混成旅團は突入の機未だ熟せず依然辨ヶ岳附近に控置す此の日黎明より我が砲兵隊の活動猛烈にして眞に攻守とを異にせるの感あり首里山上より戦線を望めば大規模に使用せる我が煙幕全戰場を掩ひ彼我の砲轟々として天地を震撼し光景眞に壯絶を極む此の間第二十四師團特に其の右翼部隊の攻撃成功の快報頻りに至り軍司令部内朗色満つ然れども正午頃以後前述の如き状況逐次判明する一方戰場は既に再び敵砲爆の獨り舞台と化するありて朗色は憂色と變ずるに至れり

五月五日

軍は攻撃を續行するも損害刻々増加するのみにして攻撃毫も進展せず

陸

軍

斯かる状況に於て更に混成旅團を投入するも勝算なきこと明瞭なるを以て一八〇〇攻撃を中止して舊陣地帯に復歸し敵に最後の出血を強要するに決せり

機密作戰日誌

一 本攻撃に於ける戦闘法上の特色は軍従來の思想に一貫し縦深に亘り紛戦地帯を作爲し晝間に於ける砲爆を避け彼我互角の戦闘を爲さんとするに在り是が爲左右逆上陸隊を以て敵の背後を擾亂するの外左の如き戦法に出でたり

1. 攻撃前夜敵深約二軒の縦深に亘り多數の挺進斬込隊を投入し敵線内部を擾亂す

2. 輕機を中心とする小部隊多數を右と共に敵線内部に潛入待機せしめ天明と共に敵線内部を移動する敵部隊を隨所に攻撃せしむ

3. 煙幕を大規模に使用す

4. 第一線は天明迄に相當の縦深を以て敵線内部に突入を完了す

二軍攻勢は新銳第二十四師團の過半を犠牲とし然も大局より觀て完全に失敗せり
敵の上陸以來攻勢を主張し續けたる軍首腦部全員慘として聲なし此の時軍司令官は高級參謀を親しく招致し虚心坦懷左の如く決意を述べられたり
貴官の判斷は常に當を得あることを確認する今回の攻撃も貴官の豫想の如く遺憾ながら攻勢失敗と斷ずるの外なし
予は軍司令官を拜命し東京を出發する際阿南陸軍大臣及梅津參謀總長より極力玉碎的戦法を避けるよう注意を受けたり予は現場に處し殘存兵力を掌握し戰略持久戦に轉換し沖繩本島の南の涯地域の存する限り沖繩島民老若男女を問はず一人にても戦ひ得る者ある限り戦鬪を續ゆるに決せり予は今後は從來の如く貴官の手足を掣肘せず一切を委任すべきを以て速かに戦線を整理し予の新決心達成の爲の策案を計畫せよ
三本攻勢の軍爾後の作戰に及ぼせる影響次の如し

一 第二十四師團の歩兵戦力は殆ど三分一以下に減少せり
攻勢失敗後不準備なる儘に防禦戦鬪を行はざるべからざる不利も亦甚大なり物量攻撃に對抗する爲には防者に取り準備こそ絶體に必要なればなり
二 軍が苦心して編成せる獨立七ヶ大隊の大半も潰滅せり
三 混成旅團は天久台占領に著手せるばかりにて首里東北地區に機動し攻勢中止に伴ひ再び舊陣地に復歸せるも態勢を整ふ暇なく半遭遇戦的に第六十二師團の左翼を突破して南下する敵と戦鬪を交ふるに至る
他部隊の編成せる洞窟陣地を新なる部隊が敵の砲撃下夜暗のみを利用して之を占領し防禦態勢を確定するには尠くも一週日以上を要することを想到せば思ひ半ばに過ぎるものあるべし
四 軍砲兵隊は本攻勢に大部の彈藥を消耗し爾後の戦鬪には一門一日十數發に制限せざるを得ざるに至れり現在迄敵をして畏

怖せしめ第一線の危急を隨處に救援せる其の威力も一舉にして弱化せり

5. 省みれば軍が半歳以上の日子を費し戰略持久の方針に基き準備せる作戰も脱線又脱線浮薄なる攻勢論に禍せられ統帥節調を失ひ諸部隊は十分なる準備なくして攻勢に驅り立てられ軍主力は空しく消耗し奔命に疲れたるの感深く然も尙今日迄堂々と戦ひ得たるは第六十二師團及軍砲兵隊が平素準備せる正面に於て善戦したると其の脱線を大事に至らざる前に是正せるに依るものなり

若し當初より作戰方針を堅持し整然たる持久戦を實施したらんには實際の持久日數三ヶ月は更に倍加し敵に與へたる損害は實に甚大なりしならん

6. 攻勢の實害は以上の如く致命的なりしも他面攻勢に伴ふ一時的な精神効果のありしこと勿論なり

其の五

軍の攻勢中止より首里戦線撤退迄 (自五月六日至五月二十八日)

五月六日乃至七日

第六十二師團は全線激闘中なり

澤嶋附近の急を救ふ爲在雨乞森第二步兵隊第三大隊を第六十二師團長の指揮下に入らしむ

第二十四師團は概ね攻撃發起の舊陣地に態勢の轉換を終れり

獨立混成第四十四旅團は第六十二師團左翼の崩壊に備ふる爲再び

天久台方面の陣地に復歸を命ぜられ概要左の如き配置に移れり

右地區隊

獨立混成第十五聯隊

獨立第一、第二大隊

基幹

獨立速射砲第七大隊

眞嘉比、天久の線を占領す

左地區隊

特設第六聯隊 (船舶支部)

基幹

獨立歩兵第三十三大隊の一中隊

白及、那覇正面の守備に任ずること如故

五月九日

敵の攻勢は全面的に熾烈となれり

幸地以東は主陣地の線以西は前田南方無名部落經塚北端、安波茶西方高地、澤嶋北側高地安謝川の線を確保しあり
内間は遂に奪取せらる

五月十日

前田、仲間地區に在りて約二週間に亘り死闘を續けたる歩兵第六十二旅團長指揮下の獨立歩兵第十一、第十二、第十四大隊は首里に又安波茶附近に在りて約二十日間に亘り善戦敢闘敵に甚大なる損害を與へたる歩兵第六十四旅團長指揮下の獨立歩兵第二十三大隊及獨立機關銃第十四大隊は經塚、澤嶋地區に夫々後退せり
以上後退せる第六十二師團の諸部隊は一ヶ月餘に亘る戦闘の爲戦力概ね五分一に低下しあり

東京小津精

陸軍

混成旅團正面安謝川河口附近敵の行動活潑なり

五月十一日

敵海兵第三軍團は遂に安謝川を渡河し天久台に進入す
首里正面の要點澤嶋附近に對する強壓と相俟つて我が左翼に對する攻撃は頓に激化す新銳混成旅團之を邀へて克く敢闘しあり

五月十二日

經塚、澤嶋、天久台附近の戦闘激烈にして天久台の西端四九五高地は遂に奪取せらる
第二十四師團の左翼前田南方地區に於ては彼我縦深に亘り混合し地形の錯雜と相俟ちて紛戦の儘彼我戦線殆ど移動せず中央石嶺正面に於ては建設途上の飛行場滑走路を利用し數十の敵戦車群一擧に首里を衝かんとして反復攻撃し來るも該正面の部隊特に戦車第二十七聯隊克く戦ひ其の九〇野砲四門は敵戦車群を撃擯し悉く之を撃退す其の右翼方面は敵の行動活潑ならざるも巧妙隱微なる滲透戦法に出であるものの如く最右翼中城灣岸に於ては大里城趾及

屋比久方面よりする重砲兵第七聯隊及軍砲兵隊一部の側射に制せられ敵は未だ敢へて運玉森高地に近接せず

五月十三日

混成旅團は天久台上の大半を喪失せるも眞嘉比南側、安里、崇元寺、高橋町各北側台端に反斜面陣地を占領し軍砲兵隊支援のもとに敵に甚大なる損害を與へつつ死闘を續行す

五月十四日

第六十二師團は經塚、澤嶋を頑守しありし歩兵第六十四旅團の戦力殆ど盡き旅團長以下洞窟の内外に於て敵と手榴弾戦を交ふるに至りしを以て十四日夜暗を利用し敵の重圍を突破して首里に後退せしめ新に平良町、大名、末吉の線を主抵抗線とせり

五月十五、十六日

敵は遮^ニ無^ニ從^ニ那覇市に侵入せんとして攻撃を強行せるも混成旅團特に獨立混成第十五聯隊は殆ど一步も敵に譲らず善戦す軍は特設第一旅團にて編成せる精銳大隊（長伊藤少佐）を混成旅團に増加

東京小津村

陸軍

すると共に海軍陸戰隊より約百組の挺進斬込隊を編成し之を大名末吉方面より敵の背後深く仲西、安謝方面に投入して混成旅團正面に對する敵攻撃力の緩和に勉めたり

五月十七日

第二十四師團正面に於ては不完全なる陣地に據る第一線歩兵は連日の敵砲爆に依り死傷續出し陣地組織も不備弱點を形成するところ尠からず西原村一五〇高地は敵に奪取せられたり

五月十八日

戦線大なる變化なし

軍は混成旅團の現陣地線潰ゆるも依然首里を中心とする陣地線に於て戦闘を繼續する目的を以て海軍陸戰隊三ヶ大隊（各五、六百名より成る戦闘には未熟なるも機銃装備は概して良好なり）を首里の陣地に接続し繁田川、職名、國場、古波藏の線に配置せり天久台、那覇の線の崩壞に瀕せるは一見軍にとりて致命的痛手にして軍首脳部は勿論全軍將兵を失望落膽せしめつつあるも首里の

大據點の嚴存する限り前述の線は國場川の障碍に托し然も南岸高地帯より有效なる支援を受け得る要線にして首里戦線左翼最後の運命を托するに足るものなり

五月十九、二十日

諸情報を綜合するに混成旅團の必死的抵抗に會せる敵海兵軍團の損害は甚大なるものの如く天久台方面敵の攻撃は著しく低調となり同方面戦線に在る將兵の志氣頓に昂揚す

爾餘の戦線も亦敵の攻撃活潑ならず

敵後方兵力の移動は相當活潑を呈しあり

五月二十一日

大里城趾を據點とする重砲兵第七聯隊敵の集中砲爆撃に依り破壊沈黙するに至るや東海岸方面の敵は漸次東飛行場を越へて運玉森高地に肉迫し始めたり

五月二十二日

軍の組織的防禦力方に破斷界に達せんとし緩徐ながら全線敵に滲

透せられ之に反撥する戦力盡きたるもの如し

特に最右翼に於ては敵は巧に我が死角を利用して與那原に進入し最左翼に於ては海陸呼應して那覇市に進入しつつあり

左翼戦線は那覇市に侵入せらるるも尙諷名、國場の線に至る縦深陣地帯に據り尙全陣地の崩壞を阻止し得べきも與那原に侵入しつつある敵は右翼の最要點運玉森を略取し一舉津嘉山に殺到し得る態勢に在り今若し軍にして急速に此の敵を排除するにあらずんば首里戦線の維持は遂に不可能となるべし敵の慣用戦法たる滲透戦術に對しては牧港、安謝川の戦例に教ふる如く其の尖端戦力の強化せざるに先だち之を一掃するを要訣とす依つて軍は迅速に與那原侵入の敵を撃攘する如く第二十四師團及軍砲兵隊を督勵するところあり

機密 作战 日誌

第一 退却の決心

戦局を達觀するに全軍將兵必死の敢闘に拘らず首里戦線の運命今

や且夕に迫れりと断ぜざるを得ず
茲に於て軍が首里を中心とする圓形複郭陣地に據り最後の戦闘を試みるや或は首里戦線を放棄して知念半島若くは喜屋武岬方面に後退し以て要害堅固にして殘存兵力に適應する地域に於ける新持久作戰に出づべきやは豫ねてより慎重検討中なりしが今や至急決定を要する重大事となれり
現在迄の各案の検討成果左の如し
一 首里複郭案

本案は平時よりの一構想にして陣地も亦之に應じ整備せられあり
然れども生存將兵の數は尙五萬内外（精銳分子は殆ど死傷し且歩兵兵器の支部は消耗しあり）と推定せられ斯かる大兵力を直徑一杆内外の狭少地域に配置するは徒に敵物量攻撃の好餌たるのみにして有利ならず殊に今尙大部健在しある遠戰兵器の如きは本複郭陣地には殆ど收容し得ざるに於て益々然り

三 知念半島後退案

四圍殆ど斷崖と海を以て圍繞せられ對戰車戰には有利なるも洞窟陣地の數少くして軍の殘存兵力を收容するに足らず既集積軍需品も亦貧弱然も軍の右翼與霸原附近に致命的破綻を生ぜんとしある狀況に於て彼我戰略態勢上軍主力を該方面に退却せしむることは頗る困難にして地形交通網の關係も亦頗る不利なる状態に在り

三 喜屋武半島後退案

喜屋武半島地區は八重瀬岳及與座岳を陸正面の據點とし海正面の大部は單獨兵と雖も攀登至難なる三、四十米の斷崖を形成し良好なる一防禦地帯なり加ふるに人工若くは天然の洞窟豊富にして概ね軍の殘存兵力を收容するに足り軍需品は第二十四師團所屬のもの該地域に今尙相當量集積せられあり更に一般戰略態勢及交通網の關係は軍主力の後退及軍需品後送に便なり
本案の知念半島案に比し遜色あるは陸正面に於ける地形比較的

平易なる部分ありて敵機甲部隊の行動容易なる點にあり
軍は以上の如く各案を検討したる後第三案を以て最も有利とせり
二十二日夜軍は更に各兵團の參謀長高級部員等を招集し軍最後の
戦闘態勢決定に關し協議せり本席上に於ける各兵團の意見左の如
し

第六十二師團

師團は形似上下の戦力殆ど盡き新に後圖を策するの餘力なく然
も首里附近の洞窟には後送至難なる數千の重傷者充滿しあり師
團長として如何で是等の戦友を見棄てて遠く知念若くは喜屋武
方面に後退するを得ん師團は麾下將兵大部の戦死せる現戦線に
於て残存の將兵と共に最期を全ふ致し度き意見なり

第二十四師團

喜屋武半島方面後退の意見なり理由は軍の研究せるところに同
じ第二十四師團は周到なる著意と努力に依り尙數十輛の貨物自
動車を保有しありて今後天候良好ならば残存の軍需品は五日以

内に新陣地に後送し得べきことを附言せり

獨立混成第四十四旅團

知念半島後退を可とする意見なり

軍砲兵隊

喜屋武方面後退の意見なり

軍司令官は二十三日夜半以上の経緯に基き喜屋武方面に後退を決
心し第一線主力の後退は五月二十九日頃と豫定し傷者及軍需品の
後送は即刻開始する如く命令せり

第二 新作戦計畫

其の一 喜屋武半島陣地占領計畫

方針

軍は残存兵力を以て玆名城、八重瀬岳、與座岳、國吉、眞榮里の
線以南喜屋武半島地區を占領し勉めて多くの敵兵力を牽制抑留す
ると共に出血を強要し以て國軍全般の作戰に最後の寄與を爲す
陸正面に於ては八重瀬、與座兩高地を據點とする主陣地帯に全力

を投入して抗戦するを主義とす

部署の概要

一 獨立混成第四十四旅團

主力を以て坂名城、八重瀬岳の線を占領し一部を以て海正面を警戒す

二 第二十四師團

與座岳附近より國吉、眞榮里を経て名城に至る線を占領す

三 前記兩兵團は一部を以て具志頭、富盛、世名城西原屋取兼城、糸満の線を占領す

四 第六十二師團

名城より摩文記にに至る海正面を占領す

此の間兵力の掌握整備を実施し且臨時混成旅團及第二十四師團正面に機動進出し得る如く準備す

五 各兵團作戰地境を左の如く豫定す

獨立混成第四十四旅團第二十四師團間

九六高地、一五六高地、世名城、東風平の線（線上第二十四師團に屬す）

第二十四師團第六十二師團間

九六高地、眞壁村、名城北端の線（線上第二十四師團に屬す）
第六十二師團獨立混成第四十四旅團間

摩文仁、九六高地の線（線上は第六十二師團に屬す）

六 軍砲兵隊

概して米須、眞壁、眞榮平間の地區に陣地を占領し各兵團特に第二十四師團及混成旅團の戦闘に協同し得る如く準備す

七 海軍根據地隊

軍占領地域中央部地區とし細部の位置は状況に應ずる如く決定す各兵團に配屬せる部隊は其の儘とす

其の二 退却作戰指導要領

（二十三日以後與那原方面の戦況發展に應じ逐次修正せり）